

# 荷動き 全業種で上向き

リーマンショック後のフリーフォール(大暴落)から立ち直りつつある日本経済。物流にも持ち直しの兆しが見えてきた。日通総合研究所(本社・東京、大前隆 社長)によると、独自に調査している「荷動き指数」の七、九期実績値はマイナス五六ポイントで、前期より三ポイント上昇。荷動きの減少に歯止めがかかっている。(小野 善隆)

### 日通総研短観・7～9月期調査

「荷動き指数」は製造業・卸売業の主要二千五百事業所にアンケート。前半同様に荷動きが増加したと回答した事業所の割合から「減少」と回答した事業所の割合を引いて算出している。

四半期ごとに次の期の「見直し」と、当該期の「実績見込み」について調査。今回は九月初旬に行い、千八百七社から回答を得た。

## 前期比13ポイント改善 10～12月期見通しさらに上向き

12業種で改善幅2ケタ超え  
底辺に張り付く傾向に変化はないものの、指数は全業種で上向いている。

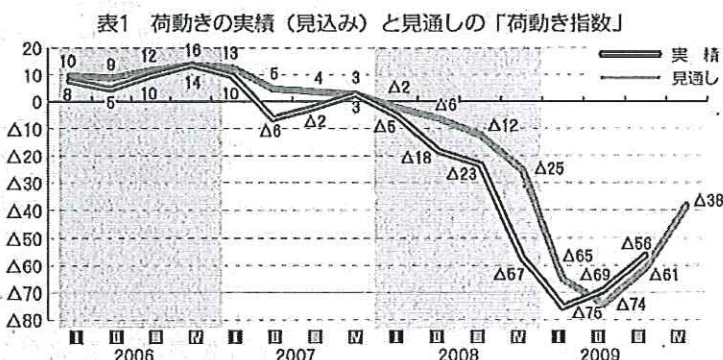


表1 荷動きの実績(見込み)と見通しの「荷動き指数」

表2 国内向け出荷量の実績と見通し(業種別)

業種	4-6月実績	7-9月実績	10-12月見通し
食糧	△24	△23	△11
繊維	△67	△68	△53
衣類	△94	△65	△49
木材	△78	△65	△36
化学	△62	△51	△22
プラスチック	△83	△73	△34
医薬品	△85	△72	△50
鉄鋼	△68	△65	△48
金属	△80	△70	△67
電気	△79	△66	△39
機械	△72	△58	△36
輸送機	△64	△32	△37
その他	△81	△65	△48
販売	△63	△51	△33
卸	△41	△20	△26
合計	△69	△56	△38

表3 国内貨物輸送量の見通し

	平成20年度	平成21年度(3月見直し)	平成21年度(6月見直し)	平成21年度(9月見直し)
総輸送量	5,112.2 (△5.2)	4,675.3 (△8.5)	4,762.2 (△6.8)	4,777.6 (△6.5)
鉄道	3,029.8 (△4.7)	2,541.2 (△16.1)	2,535.8 (△16.3)	2,753.5 (△9.1)
自動車	46.2 (△9.1)	41.6 (△10.0)	41.7 (△9.7)	42.6 (△7.8)
航空	2,807.2 (△4.1)	2,562.7 (△8.7)	2,610.4 (△7.0)	2,663.7 (△6.1)
内航	1,879.1 (△6.3)	1,710.3 (△9.0)	1,725.3 (△8.2)	1,734.9 (△7.7)
内海	378.7 (△7.6)	359.8 (△5.0)	348 (△8.1)	335.5 (△11.4)
国内航空	0.996 (△4.7)	0.919 (△7.7)	0.906 (△9.0)	0.950 (△4.6)

「食料品・飲料」織以上の改善を記録。維・衣服」「金属製品」「精密機械」は三ポイントとそれぞれ、大幅に「輸送用機械」は二九ポイント、「卸」改善した。売・消費財」は二ポイント、「エコカー補助制度」エリ、「精密機械」だけで「輸送用機械」は二ポイント、「電気機」四ポイントで同七ポイントの改善。「鉄道」コンテナ」「内航」コンテナでもマイナス五〇ポイントを切った。十一月は三八ポイントで、前期の見直し値について、年同様に急落した反動も、全機関ともさらなる改善が予測されている。

「卸売・消費財」を除く全業種で改善を予測している。

### トラック回復の足取り重く

輸送機関でも、全機関が四十七年ぶりに五十億円の増収を挙げた。一般トラックはマインスマインスマイン、四十七億七千万円増収。前同調査時よりマインスマインポイントで、回復の足取りは重い。一〇年見直し値より一〇ポイント以上の改善と、トンの下方修正となり、本格的な回復は、まだまだ時間がかかりそうだ。

荷動きに波及し始めており、「精密機械」だけで一四ポイント、「電気機」四ポイントで同七ポイントの改善。「鉄道」コンテナ」「内航」コンテナでもマイナス五〇ポイントを切った。十一月は三八ポイントで、前期の見直し値について、年同様に急落した反動も、全機関ともさらなる改善が予測されている。

### 内航海運輸送のみ下方修正

貨物輸送の見直しから、内航海運輸送のみ下方修正されている。これは、燃料費の高騰が影響している。また、船舶の修理費も増加している。しかし、内航海運輸送は、燃料費の高騰が影響している。また、船舶の修理費も増加している。しかし、内航海運輸送は、燃料費の高騰が影響している。また、船舶の修理費も増加している。